

2016年度 修士論文

外国人スポーツ留学生のライフストーリー
～トンガ王国からの歴代ラグビー留学生を対象として～

Life stories of foreign student athletes

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツクラブマネジメントコース

5016A315-9

松本 健嗣

Kenji Matsumoto

研究指導教員： 間野 義之 教授

目 次

I. 研究の背景	1
II. 先行研究の検討	3
1. 一般の外国人留学生に関する研究	3
2. 外国人スポーツ留学生に関する研究	4
3. 先行研究の検討のまとめ	4
III. 研究目的	6
1. 研究の目的	6
2. 用語の定義	6
IV. 研究方法	7
1. インタビュー対象者の選定	7
2. インタビュー方法	8
3. インタビュー期間と内容	8
V. 研究結果	10
1. A氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	10
2. B氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	14
3. C氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	16
4. D氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	20
5. E氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	24
6. F氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	27
7. G氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	30
8. H氏のスポーツ留学に係るライフストーリー	33
9. 大東文化大学ラグビー部特別顧問 鏡保幸氏	37
10. 1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific Sione Taumoeplau 氏	39
11. トンガ王国ラグビー連盟 CEO Feao Vunipola 氏	41
12. トンガ王国ラグビー連盟前会長 Epi Taione 氏	43

VI. 考察	46
1. 来日前の状況	46
2. 留学のきっかけ	47
3. 大学留学中	48
4. 就職のきっかけ	49
5. 就職（競技継続）	50
6. 競技引退後	51
7. 日本で生活する上で必要な要素	52
8. 今後について	53
9. 考察のまとめ	53
VII. 結論	57
1. 本研究の結論	57
2. 研究の限界	57
3. 実践への提言	57
注	59
謝辞	60
引用・参考文献	61
付属資料	63

I. 研究の背景

2017 年新春の第 93 回東京箱根間往復大学駅伝競走において、往路 2 区を疾走する外国人学生選手は過去最多となった。国内の大学スポーツを俯瞰すると、多くの競技において目覚ましい活躍をしている外国人スポーツ留学生選手が見られる。彼らは留学生として来日し、学生の立場に於て大学スポーツに参加している。

国内の留学生について、文部科学省は 2020 年までに、グローバル戦略を展開し日本への外国人留学生を 30 万人に増加を目指す「留学生 30 万人計画」を実現すべく、2008 年 7 月当時福田内閣が発表し、現在第二次安倍内閣でも引き継がれている。具体的には、国・地域・分野などを考慮し知的国際貢献等を果たすことに努め、また、大学等や社会の受け入れ就職など卒業・修了後の進路に至るまで、点ではなく線として、支援するとなっている。この 30 万人の中には先述の外国人スポーツ留学生も含まれるが、外国人スポーツ留学生の具体的な目標等明記はなされておらず、関係当局に確認したところスポーツに関しては積極的な発言は得られなかった^{注1)}。

しかし、現状、外国人スポーツ留学生は、主に日本の高校・大学でラグビー、サッカー、バスケットボール、陸上など多岐にわたり活躍している。彼らが在学期間、日本の運動部で活躍し、日本人との競技を通じた交流が行われている。

また、大学や実業団チームで競技を継続するなかで、国内のスポーツに貢献する留学生も見られる。顕著なのは、ラグビートップリーグであり外国籍枠 2 名・アジア籍枠 1 名・特別枠 1 名（ジャパンラグビートップリーグ規約,2016）と外国人が活躍できる舞台が整っている。ナショナルチームでも、外国籍ながら日の丸をつけて活躍する姿が見られる。また、Jリーグでも同様に外国人が活躍できるルールが設定されている。更に、競技引退後も日本に留まり、高校や大学、実業団やプロチームで指導者として活躍している者もいるなど多くの例が見られる。一方で、在学期間を過ぎると外国人スポーツ留学生は帰国する者が多く日本で引き続き居続ける数は限りなく少ない現状がある。恐れずに言うなれば期間限定の「助っ

人」の役割を担っているに等しい。

外国人スポーツ留学生が国内のスポーツ状況に大きくかかわっている現状があるなか、まとまった報告書もなく、担当部局も消極的な姿勢であることから、そもそも全般的に外国人スポーツ留学生に関する知見は不足しており、実状が把握できていない現状がある。外国人スポーツ留学生に関する研究蓄積は少ないものの、具体的な実績として日本との 2 国間の関係構築を通じた交流が、スポーツ留学のきっかけとなったケースも存在している。

例えば、国際交流の観点から世界を見渡すと、日本とトンガ王国の国交は大変良好である。これは、双方の要人が頻繁に行き来する程のトップ外交が長年続いていることから明らかである。

国交が良好である一つの要因として、中世に中国から日本に伝来した「そろばん」をトンガ王国に普及させたことが挙げられる。これは、大東文化大学名誉教授である中野敏雄氏が、1976 年同大学ラグビー部部長を務めていた頃に遡る。中野氏が、ニュージーランド遠征の際にトンガ王国に立ち寄り、当時の国王であるタウファアハウ・トゥポウ IV 世に「そろばん」の普及を依頼されたところに原点がある。(2015 年 6 月 28 日 毎日新聞朝刊) 現在、トンガ王国の公立小学校では「そろばん」がカリキュラムに組み入れ必須化になっているほどであり、「そろばん」の全国大会が開催されるなどトンガ王国中に広まっている現状がある。

更に、1980 年以降現在まで、トンガ王国から大東文化大学に継続してラグビー留学生が入学していることは、大東文化大学からトンガ王国への「そろばん」の普及から始まった成功例である。トンガ王国から大東文化大学への留学生が、日本代表として、トンガ王国籍または日本へ帰化し、ラグビーで活躍していることから顕著である。

Ⅱ．先行研究の検討

日本国内の留学生に注目し、一般的な外国人留学生に関する研究ならびに外国人スポーツ留学生を対象とした調査研究を中心としてレビューを進めた。

1．一般の外国人留学生に関する研究

外国人留学生に関する研究は、当初、留学生自身を対象とし、日本に対する意識について注目した研究が主であった。高井（1989）は、対日イメージと感応度に注目し、日本人の人間関係は複雑で理解し難く、外国人に対する態度も閉鎖的で消極的であり、在日留学生が不満を持っていると述べている。

後に、文化論的観点から、葛（1999）は、留学生の異文化適応に注目し、来日動機を持つ者の方が留學生活の満足度が高いと明らかにしている。来日動機に関する研究が進められる中で、若生（2014）は、留学生は就職・キャリアパスに結びつけて日本へ留学すると述べており、留學動機づけに共通するものは外国語能力の取得・向上であると主張している。袴田（2011）は、就職している元留学生だった者に対する研究で、業務上必要な言葉や説明力など就職する上で必要な日本語力の重要性を述べている。当初、留学生の意識についての研究が主な対象であったが、後に留學前から留學後に至るまでの、経緯や実状に注目した研究に移行していることが分かる。

近年において、久野（2015）は、外国人編入留学生に着目し、編入留學後の問題点とその要因について日本語能力だけでなく、価値観の違いやカルチャー・ショックに対する対応能力不足、成功体験モデルとなる人材の不足を調べるうえで、ライフストーリー分析の有効性を示した。また、進路決定要因にも着目しており、大学在学中の様々な経験がその後の進路を選択する基準となると述べている。

2. 外国人スポーツ留学生に関する研究

外国人スポーツ留学生に関する研究は、当初、運動部活動に所属する外国人スポーツ留学生の実態に焦点を当てた研究であった。松本（1991）は、大学にスポーツ留学している学生の出身国や競技について紹介している。

後に、大学の支援体制について、松元ら（2009）は、大学在学中のサポート拡充の必要性や、部活動に傾倒しすぎるために学生本分である学業が阻害されていると述べている。また、大学卒業後に必要なスキルについて、三代（2014）は、セカンドキャリアに向けた日本語習得の重要性を述べている。

グローバルな観点からは、千葉ら（1999）は、国境をまたぎ活躍する選手には様々なタイプがあることを示した。また、Maguire ら（1998）は、EU域内ではプロサッカー選手が自由に移籍できるとされたボスマン判決にふれ、サッカー選手の帰属意識についてふれている。

研究の背景で、日本のラグビートップリーグに少し触れたが、持続的に同じ国から来日し活躍する外国人スポーツ留学生に関して、北原（2010）は、在日トンガ人の多くがラグビー関係者であると述べており、トンガ王国からのラグビー選手が来日する背景を概観している。また、グローバルな移動とスポーツの観点から、北原ら（2009）は、在日トンガ人選手は日本チームで活躍する一方で、契約終了後には他国のチームに移籍する可能性を視野に入れてプレーしていると述べている。更に、小林（2010）は、多文化共生に見合う成果を得るためには、持続して海外出身者に対しての様々な環境整備を拡充させる必要性を、トンガ王国からの留学生を成功例として挙げ主張している。

3. 先行研究の検討のまとめ

以上、先行研究の検討を進めるなかで、多くの研究は外国人留学生および外国人スポーツ

留学生自身を調査対象として、留学生の対日感情や異文化への適応を始め、学生生活そのものを調べるもの、大学の支援体制拡充を述べるものが多く、日本に来たきっかけや、日本におけるその後の社会との関係など、外国人スポーツ留学生の来日前から来日後現在に至るまでの実態を明らかにしている先行研究は見られないことがわかる。

一方、久野（2015）など、外国人留学生のライフストーリーを記述することにより、留学前後の経緯について詳細に記述しながら実態について明らかにしており、有効な手段の一つとして考えられる。

先行研究の検討から、本研究においては、外国人留学生研究において実績のあるライフストーリー分析を使用し、トンガ王国から大東文化大学に留学した外国人スポーツ留学生を対象とし検討を進めることとする。

Ⅲ. 研究目的

1. 研究の目的

本研究の目的は、日本における外国人スポーツ留学生の来日前から来日後現在に至るまでの実態を、大東文化大学とトンガ王国に着目し、ライフストーリーを通して明らかにすることである。

2. 用語の定義

本研究を進めるにあたり、本稿で使用する用語について、外国人スポーツ留学生の定義をおこなう。

松元ら（2009）は「スポーツ留学生」を、スポーツ選手としての留学、または競技力向上や、そのための練習活動を行うことを主目的として、日本に滞在している外国籍留学生と定義した。しかし、近年では日本でも都道府県を移動しスポーツで活躍する生徒をスポーツ留学生という言葉を用いている。そのため、本研究では、海外から来日したことを明確にすべく、上記を「外国人スポーツ留学生」と定義する。

IV. 研究方法

1. インタビュー対象者の選定

外国人スポーツ留学生に関する先行研究レビューを進めるなかで、その研究蓄積の少なさに注目し、本研究では外国人スポーツ留学生の実態を明らかにするため、インタビュー調査を通じて、留学前から現在に至るまでの詳細な経緯を辿り、逐語録から生活史を概観するライフストーリー分析を採用することとした。外国人スポーツ留学生の生活史を明らかにし、それぞれの共通点や相違点について考察をおこなう。

外国人スポーツ留学生の全体母数は、先行研究においても詳細な全容は明らかになっていない。外国人留学生全体については約 21 万人との推計(独立行政法人日本学生支援機構)があるが、スポーツを留学目的とした分類が行われていない現状がある。本研究では対象となる外国人スポーツ留学生の詳細な生活史実態を明らかにするため、留学経緯が明らかで継続してトンガ王国からスポーツ留学生の受け入れをおこなっている、トンガ王国から大東文化大学へ留学したスポーツ留学生を対象とした。また、留学後、ナショナルチームへの所属、日本国内での就職などライフイベントでの比較のしやすさからラグビー留学生を対象を絞って調査をすすめることとした。

大東文化大学の外国人スポーツ留学生でトンガ王国からのラグビー留学生であった者が、何名入学していたか不明なため、大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏に問い合わせた。その結果、1980 年～2016 年の 37 年間に 29 名の留学生が入学していることが判明した。また、この 29 名中 21 名が既に同大学を卒業していることが確認できた。競技引退後のセカンドキャリアを語るうえでは、卒業した者をインタビュー対象者とすることにした。連絡が取れる者を可能な限り探索した結果、日本に在住している 7 名および海外に在住している者で一時帰国していた 1 名の計 8 名にアポイントを取りインタビューを行った。

本インタビューを補完すべく、大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏に外国人スポーツ留学生の受入の概況を伺った。更に、トンガ王国に渡航し、B 氏を介し在日トンガ王

国大使よりトンガ王国の歴史やラグビーに詳しいとされる 1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific の Sione Taumoepiau 氏、トンガ王国ラグビー連盟 C E O の Feao Vunipola 氏、同連盟前会長の Epi Taione 氏にインタビューを行った。

2. インタビュー方法

大東文化大学の外国人スポーツ留学生であった上記 8 名に対して、半構造化インタビューを実施した。インタビュー項目については口頭に加え紙面で配付した。インタビューにあたり、母国語の違いからミスコミュニケーションを防ぐべく、日本語でのインタビューが可能か電話やメール等で確認をした。なお、インタビューで不鮮明だった点については、後日電話やメール等で再確認を行った。個人情報保護の観点から対象者は本研究において匿名とし、仮名 A～H で記載する。

さらに、インタビューを補完するために面会した日本およびトンガ王国の関係者 4 名については、日本語および英語で面会を実施した。ご本人に了承を頂き実名で記載する。

3. インタビュー期間と内容

インタビュー期間は、2016 年 9 月 19 日～12 月 16 日で行った。対象者は、社会人や現役選手であるため、先方の休日や都合の良い日程を伺いインタビューを行った。インタビューの日程調整においては所属している職場や直接対象者と連絡を取った。

インタビュー内容は、「来日前の状況」、「留学のきっかけ」、「大学留学中」、「就職のきっかけ」、「就職（競技継続）」、「競技引退後」、「日本で生活する上で必要な要素」、「今後について」の 8 段階となっている。

なお、インタビューを補完するために実施した面会は、2016 年 11 月 6 日に秩父宮ラグビー場にて、大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏に対して行った。また、2016 年 12 月 29 日～31 日に Loumail Lodge（トンガ王国）にてトンガ王国ラグビー連盟 C E O の

Feao Vunipola 氏、同連盟前会長の Epi Taione 氏、更に、B 氏を介し在日トンガ王国大使よりトンガ王国の歴史やラグビーに詳しいとされる 1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific の Sione Taumoepiau 氏の 3 名に対して行った。

V. 研究結果

大東文化大学へのラグビー留学経験者を対象とし、A～Hの8名へのインタビューをおこなった。各人のプロフィールは表1の通りとなっている。逐語録を作成ののち、先行研究におけるライフストーリー分析の取りまとめかたを参考にしながら、本論の焦点であるスポーツ留学を起点に、ライフストーリーを「来日前の状況」、「留学のきっかけ」、「大学留学中」、「就職のきっかけ」、「就職（競技継続）」、「競技引退後」、「日本で生活する上で必要な要素」、「今後について」の8段階に分けて記述した。

記述に当たっては、スポーツ科学研究を専門とする博士後期課程学生による確認を受けながら随時修正をおこなった。重要と思われる本人の発言についてはカギ括弧によってそのまま記述した。

以下、8名のライフストーリーに関する記述を示す。

表1 8名のプロフィール紹介

仮名	年齢	インタビュー日	在籍年度	競技種目	学部	留学費用	競技	帰化の有無	現所属先	主な経歴
A	60歳	9月19日	1980-1984	ラグビー	経済	日本	引退	×	首都圏私立大学	第1回W杯日本代表
B	59歳	12月16日	1980-1984	ラグビー	経済	日本	引退	×	自営業(オーストラリア)	日本代表
C	51歳	10月9日	1985-1989	ラグビー	経済	日本	引退	○	メーカー	第1～3回W杯日本代表
D	45歳	9月25日	1991-1995	ラグビー	経済	日本	引退	○	自動車会社	第3回W杯日本代表
E	46歳	10月16日	1991-1995	ラグビー	経済	日本	引退	○	メーカー	大学選手権優勝
F	39歳	10月15日	1996-2000	ラグビー	経済	日本	引退	○	運送会社	日本代表
G	36歳	10月16日	1998-2002	ラグビー	経済	日本	引退	○	メーカー	第6回W杯日本代表
H	36歳	11月17日	2000-2004	ラグビー	経済	日本	現役	○	社会人ラグビークラブ	大学選手権ベスト8

1. A氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

A氏は、「よりいい生活、よりいい教育」と語るよう、環境の良い所に行きたいとの思いがあった。また、将来は自分の家族を「ちゃんと仕事して助けて」と考えていた。当時は、

現在と違い、ニュージーランドやオーストラリアといった海外に行く機会は滅多になかったと振り返る。ただ、勉強の成績が良い一部の者がトンガ政府や海外から奨学金を貰い留学出来ることは認識していた。

一方で、高校時代、トンガラグビー代表であり、隣国のサモアやフィジーなどと国際試合をこなすなど既にトップ選手であった。

・留学のきっかけ

ある日、日本のそろばん協会の先生がトンガへそろばん指導に来た。その先生は、大東文化大学ラグビー部部長でもあった。そこで、大東文化大学に来ないかとの声がA氏に掛かった。A氏は、「日本から奨学金が与えられ、ラグビーができる二人を日本に連れて行く」と言われた当時を振り返る。留学費用の支援がなければ留学は出来ない家庭環境であった。そのため、家族はA氏を喜んで送り出した。

また、A氏は、「日本はラグビーをやっているだろうか、たとえやっていたとしても弱いのではないか」と思ったと話す。

・大学留学中

日本で1年間日本語を勉強した。後に紹介するB氏と共に、トンガからの留学1期生として同大学に入学した。しかし、日本語がわからず周りの人と満足に会話が出来なかった。更に、コミュニケーションが取れないゆえに、「変な考えだけど、俺のことみんな笑ってるんじゃないか」と深く考え悩んだ。また、言葉や人間関係だけでなく、日本の食事に慣れるのにも苦労した。

ラグビーは、平日は部活動に打ち込み、休日は基礎体力を作るために近くの山などに走りに行った。出来ることを確実にこなすことで、日本でラグビーをすることに自信がついた。

在学中、後の妻となる女性と出会った。「妻は当時、日本の留学生向けのホームステイ支

援をやっており、別の大学に通っていました。留学生支援イベントで知り合った」と話す。

A氏の妻は、日本語、中国語や英語と三か国語が話せ在学中の心の支えになったと振り返る。

・就職のきっかけ

当時、近くのメーカーと大東文化大学は定期的に練習試合を行っていた。双方の監督が話し合い、A氏が同メーカーに正社員としての就職が決まった。その際、A氏はトンガに帰国することは全く考えていなかった。「もう向こうから来る時はそうもう決めていたんですよ。もう戻らないって。日本に来て一生懸命頑張って、なんかチャンス作るって。だって、戻ったって公務員以外会社とかないから」と語る。

・就職（競技継続）

1980 年代初頭、日本のラグビーは、アマチュアの時代であった。A氏は、定時まで就業した後、ラグビーの練習をした。学生の頃日本語も含めラグビーも一生懸命頑張ったことで、職場にも適応できたと話す。特に、言葉に関しては妻のサポートが大きかった。

そんな中、ニュージーランドで開催された第1回ラグビーワールドカップに、日本代表として後輩のC氏と共に出場した。また、7年ぶりに初めてトンガにも帰国し、家族や親戚と再会した。

・競技引退後

正社員であったA氏は、ラグビーを引退しても仕事を継続した。仕事のアドバイスも妻がしてくれた。

同時に、これまで自分を支えてくれた方に対し恩返しをしたいとも思い始めた。「トンガの家族を学費など支援し助けます。日本で1万円は小さいかもしれないけどトンガでの1万円は大きいですよ」と語る。

また、A氏は母国のラグビー選手の事も忘れていない。「自分もそこにいたからさわかっている。スパイク一つしかないから、みんな交代交代」と、満足にラグビーの練習が出来ない環境を、お金や物資を送り支援する。

- ・日本で生活する上で必要な要素

プロ契約したとしても資格の勉強をする必要性を、A氏は後輩に伝える。それは突然、契約が途切れても勉強していれば日本で生活が出来る考えるからだ。加えて、「ビザの簡略化とか」と話す。ビザの取得も日本で生活する上で大きなハードルであった。現在A氏は、日本に帰化せず永住権を獲得し安心して暮らす。

また、住んでいる地域の自治会長も務め、近隣住民とのコミュニケーションを大事にした。A氏は、「やってみたかったんですよね。みんな喜んでくれた。おじいちゃんやおばあちゃんは結構」と話す。

- ・今後について

ラグビーだけの支援でなく、トンガからの留学生を何らかの形で支援したいと語る。「自分に持つてる経験をなんとか教えたほうがいいかな」と話す。

2. B氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

B氏は、トンガ王国屈指のエリート高校に通っていた。幼い頃から英語を学び、トンガ王国一斉に行われる高校入試では上位の成績を修めた。

高校では、授業が英語で行われかつ定期的に実施される試験に合格しなければ進級できなかった。国内のテストにて優秀な成績を修めており、高校卒業後は、海外の医学部に進学予定だった。高校生活は、勉強中心でレベルが高く「大変難しかった」と語る。ただ、B氏は負けん気の強さがあり、海外で成功したかった。

・留学のきっかけ

日本の大東文化大学ラグビー部部長でありそろばん協会の先生が、国王とお会いした。その際、国王より日本でそろばんを教えてほしいとの話があったようである。そこで、B氏に大東文化大学留学の白羽の矢がたった。新しい土地でチャレンジしたいと考えていたため、留学には前向きだった。もう1名の留学生はA氏であった。

・大学留学中

入学前に日本語を1年間勉強し翌年、大東文化大学に入学した。A氏と共にラグビーでも切磋琢磨した。B氏は、「A氏はラグビーが上手かった」と話す。ただ、B氏も着々と競技力をつけた。

・就職のきっかけ

常に新しいことにトライすることを心掛けていた。就職は、A氏同様、メーカーに入社を決めた。「プロ契約の時代ではなかった」と当時の事を語る。

・就職（競技継続）

正社員として仕事をし、ラグビーの練習をしていた。日本のサラリーマン生活は大変だと実感した。一方、ラグビー日本代表に選出されるまでに至った。ただ、日本には数年間しかいなかった。

その後は、同メーカーの海外支社を希望した。新たな国で挑戦をしたかったと話す。引き続きラグビーも続けた。

・競技引退後

独立し会社を運営することを考えていた。ラグビーは趣味として、クラブチームで活動した。「日本との架け橋」になるようなことをしたかったと述べる。現在は、オーストラリアで会社を運営する。その傍ら、トンガ王国や日本へも仕事で頻繁に行き来する。

現在でも、B氏は、大東文化大学を始め、当時の日本代表選手などへの影響力は大きい。後に紹介する、H氏の就職先にも掛け合った。

・日本で生活する上で必要な要素

B氏は、日本にいるなら日本語で、英語圏にいるなら英語で、ビジネスでもプライベートでも堂々と向き合う姿勢が大事と話す。

・今後について

「何も決めてない」と言う。この姿勢はこれまでも同じである。目の前のものに全力で向き合う。あれこれ考えないとも話す。ただ、常々日本との架け橋になることをしたいと考えていると再度強調した。

3. C氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

C氏は、トンガでのラグビーの盛んさを「日本でいえば野球とか相撲」と例える。当時、ラグビー以外にもサッカーや陸上にも取り組んでいた。しかし、一番ラグビーが好きだったと話す。また、文武両道を目指していた。英語も勉強しており、高校時代は、既にトンガ代表であった。

・留学のきっかけ

A・B両氏同様、大東文化大学への留学の話がC氏に舞い込んだ。C氏は、「最初僕は行きたくなかった。親も反対していたんです。日本がラグビーやってるのも知らなかった」とトンガでの生活を予定していた。C氏と共にもう一人声が掛かったが、彼もまた留学には消極的だった。背景として日本は危険な国との話を聞いた事も大きな理由だった。

ただ、一期生の二人（A・B両氏）が頑張っていたから自分にも留学の声が掛かったと当時を振り返る。

・大学留学中

一期生同様、入学前、1年間日本語を含め文化を勉強した。C氏が来たとき、一期生を受け入れていた経験から、スタッフや学生も柔軟に対応してくれた。それでも心配はたくさんあった。「一番大変だったことは日本語ですね。何にも知らないところに来た感じ。ホームシックもあったけどね。他の人とうまく話すのが出来なくて」と、言葉や環境の違いに大きく戸惑った。しかし、コミュニケーションが円滑に取れるようになるとラグビーにも集中できた。C氏が在学中、同大学は大学選手権初優勝を飾る。いわゆる世にいう「トンガ旋風」の礎を作った。

・就職のきっかけ

「一期生はメーカーに入った。働いたときに僕もそうしたい。卒業したら日本の会社に入りたい。ラグビーしながら仕事したい」との思いを抱いていた。当時の監督も、メーカーと就職について取り合ってくれた。C氏には一期生の印象があまりにも強く、自分も同じように選択したいと考えていた。

一方で、「支社が、ニュージーランドにあったんですよ。ニュージーランドは2、3時間の近くて、お父さんお母さんそこにいる。帰りたい」と日本以外の国での就職も希望していた。

・就職（競技継続）

C氏は一期生と同じメーカーに入社した。ワールドカップ第1回大会から3大会連続で日本代表として出場した。その名は学生の頃にも増して世間に広まった。会社のラグビー部では主将も務めた。

また、「いつか来るもの。出来るだけ長く出来るように、要は自分の体のケアとかねりカバリーしっかり。だんだん年取ってくる。出来るだけ長く。あとは引退して何をするか考えて」と、引退後も見据えて競技をしていた。現役の終盤は、プレーイングコーチとして選手と指導者の双方の立場でラグビーに向き合った。

帰化したことについては、ビザ更新の煩雑さを指摘する。また、この時既に結婚し子供もいた。「僕が帰化したのはそこなんですよ。あまりにもめんどくさくてビザが。日本に子供たちが学業に取り組んでいて、帰化したほうがいいかな」と話す。

・競技引退後

「僕、今営業をやっているんですけど、会社の考えで大学関係の仕事をやっている。ラグビー関係のところに入りやすい。どうぞどうぞ来て。すごくラグビー通して仕事出来ている

し感謝している。友達とかね。ラグビーの関係はすごく大きいなと今でも思っている」とラグビーの経験が仕事にも生きている。更に、「プロ契約はそういう首になったら終わり。帰っているはず」と、プロ契約であれば契約期間が切れると帰国せざるをえないと、正社員である自分との違いも語る。

C氏は、正社員として働きながら大東文化大学ラグビー部監督にも就任し、母校の後輩の指導にもあたった。また、現在はアドバイザーとしても同大学ラグビー部に関わる。C氏は、かつては留学の勧誘をされる側だった。現在は、トンガに赴き同大学に選手を勧誘する立場になった。勧誘する際、後輩には、「僕らが成功した道は、なかなか出来るものじゃない。ちょっと頑張っても簡単な道じゃないんです」と現状の厳しさを交え紹介する。

また、日本代表で外国人が活躍する素地を作ったのはトンガ人であると胸を張る。「我々がその道を開けた。はっきり言えば。それだけ認めて貰ってる。頑張らなあかん」と責任感も持つ。

・日本で生活する上で必要な要素

「日本語勉強しないとだめでしょう。僕らにとっては。完全に日本語喋れないとだめですよ。社会人と大学は違う」と、仕事とラグビーで使用する日本語のレベルの違いに苦労したと語る。

また、近所づきあいには積極的である。「隣組とかね、そういうの。結構年寄りが多く楽しい、面白い」と月に1回程度の集まりに参加する。

・今後について

「定年までは行くと思いますよ。子供達も3人いるんで」と、C氏の子供達2人は結婚して安定した生活を送っている。ただし、「僕帰りたいですよ。引退したらゆっくりしたいな」と、トンガへの帰国も考える。更に、「大学3年生に息子がいるので、社会人になれば僕の

役目は終わりかな」と語る。

しかし、C氏には使命がある。2019 年、日本で開催されるラグビーワールドカップのアンバサダーとしても活動しており、同大会の成功も願っている。

4. D氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

D氏の祖父はハワイに、父はニュージーランドに在住していた。D氏は、母と兄弟と共にトンガで生活をしていた。祖父や父からの仕送りで生計を立てていた部分が大きかった。兄弟も多く、D氏は次男であった。幼い頃から多種目のスポーツを経験した。例えば、サッカー、テニス、ボクシングや陸上である。「トンガにいたときは 100Mチャンピオンだった」と語る。勿論、ラグビーには携わっていた。ただ、いろいろなスポーツを経験することで後に大活躍するラグビーの素地が作られたのではないかと振り返る。加えて、吹奏楽の練習に参加するなど文化面にも興味を抱いていたようだ。

また、トンガ王国は昔、イギリスの保護領であり幼少の頃から英語教育を受けていたと話す。そして、12 歳頃にトンガ王国全土で将来を左右する高校入試が行われるという。高校では、文武両道を目指しており、ほとんどのカリキュラムが英語で行われていた。

・留学のきっかけ

D氏は文武両道を目指していた。祖父がいるハワイの大学を受験し、トンガ王国政府の大学奨学金の申請もした。「まあ、どっちかというともうちょっと勉強を続けたいなと思って」と語るように、ラグビーだけでなく勉強も将来の視野に入れていた。

そんな中、D氏は大東文化大学への留学の話が届いていることを知った。留学を決めた理由を訊ねると「そろばん留学とラグビーができるということだったので。そこが初めて選択した」とのことであった。また、先輩たちが同じ道を歩んでおり既にルートが出来上がっており安心して決めたとも話す。D氏他 2 名（うち一名は後に紹介する E 氏）が勧誘されており、共に来日した。

・大学留学中

トンガから留学した先輩たちと同様に1年目は大学内で日本語を勉強し、翌年大学に入学した。ラグビー部では、4年間主力として活躍し大学選手権優勝の立役者であった。またA氏同様、大学生の時出会い付き合った女性と後に結婚したが、学生の頃から様々なサポートを受けて日本での生活に慣れた。

・就職のきっかけ

「三年目の時からやっとうとするのと、卒業するとどうするのって考え始めたんです」と大学3年時に就職について考え始めた。「選択肢の中では、社会人でやるのか、大学院の労務管理の勉強しようかなと思った」と、来日前同様勉強にも力を入れたかった。そして、大学院進学を考えていた。また、「先輩が、大学を卒業して日本の企業に就職して残った。帰らなくてもいいんじゃないの。で、帰っても何をするのか、まあ仕事はあるとは思うけども。産業がないもので。日本語活かすとかはなくて。なんか日本との間の架け橋みたいな仕事」と言うように、トンガに帰国して就職するつもりはなかった。

就職先は、先輩達同様、監督が協力した。ただ、D氏は「僕の中では行くんだったら日本の中で一番の会社を目指して」と、自分でも就職先を探したと語る。

・就職（競技継続）

D氏は、自ら探した自動車会社へ就職した。その際に重視したのは正社員での雇用であった。「体が資本なので。ちょっとでも怪我したら休んだらなんか自己管理がどうのこうのプロジェクトじゃないのかと言われる」と、ラグビーのみでの就職は考えなかった。定時まで仕事をしその後練習を行った。ただ、「仕事が残れば練習の後、9時だったり10時だった。1時間でも仕事して帰る」と練習後に残業をする事も多かった。しかし、職場の同僚がD氏を気遣い残業に戻らなくていいことも多々あった。

学生の頃から、日本での生活を決めていた。ただ、「ビザ毎年更新じゃなくても帰化すれ

試合に出る機会も、外国人なもんですから」と語る。また、「帰化すれば別に規制もなく日本人として出れる」と、ラグビーの試合における外国人の出場規制が、日本に帰化した大きな理由でもあった。そんな中、同僚の支えもあり、D氏はラグビー日本選手権で優勝した。また、C氏と共にワールドカップ日本代表選手としても活躍した。「日本でなんか。うまくやってゆけるのかなという自信がなんか出てきた」と、当時を振り返る。

・競技引退後

ラグビーを引退した後D氏は、色んな方にお世話になったことを特に強く感じた。「諸先輩。僕らが三代目だったけど。連れてこれてありがとう。なんか嬉しかったなあ」と語る。また、「まあ辞めたときはやっぱりなんか、現役は辞めるけどなんか関わりたいなとずっと思ってたんだけどラグビー。あとは何かせつかく日本に来させてもらったものでお返しをしたいと、社会貢献したい」との思いから、正社員として働きながらも中学生のラグビースクールの指導員をした。更に、もっと高いレベルの指導がしたいとボランティアながら強豪高校のコーチに就任した。D氏が指導した当時の高校生が、先日のリオデジャネイロオリンピック日本代表として出場し、快進撃を起こした。

・日本で生活する上で必要な要素

D氏は、「ビザの簡略化とか」と語るように外国人にとってビザの取得は難しい問題だと感じた。そのため、規制緩和が必要だと考える。また、日本の教育機関が、責任もって留学生に勉強できる環境を提供する必要性を説く。更に、D氏は留学生に対する日本社会の現状を肌で感じ「結果的に学業も出来ない、じゃあ何のために日本に？ラグビーだけ？」と語彙を強めた。現在職場では、人事関連の業務に携わっているからこそその問題意識があった。

・今後について

「僕もね、なんか大学院でも行こうかなと思って、ちょっとまだ勇気が一步踏みだせない」と自己啓発の姿勢も見せる。

また、「日本のラグビーにも貢献していきたいし、会社にも貢献しないといけないし、いろんな、日本のために役に立つがいいなあ」と社会貢献をしたいと決めている。将来は、実業団のラグビー部監督就任を目指す。「夢でもあり、絶対なりたいなと僕は思っている」と語る。

更に、D氏は最近嬉しい報告を受けた。それは、息子が他競技からラグビーに種目変更すると突然言われた事である。「僕的にはまあ嬉しいですけど」と、父の背中を見てくれていたことに感激した。

5. E氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

E氏は、ラグビーだけでなく、陸上の短距離にも取り組んでいたと話す。ただ、スポーツより勉強に力を入れていた。「お父さんは勉強のほうが一番大事。よく言われてた」と、スポーツは競技期間が短命であり、勉強をやっていないと後に後悔すると常々言われていたと話す。また、D氏と同じ高校に通い文武両道を目指し生活を送っていた。

・留学のきっかけ

E氏は、「本当は私は高校卒業してトンガの教育大学に行きたかった」とトンガでの進学を希望していた。理由は、将来学校の先生になりたいからである。別途、トンガ王国政府による南太平洋の大学進学奨学金申請をE氏は行っていた。

しかし、先輩たち同様に大東文化大学より留学の話を持ち上がり日本への留学を決めた。「本当はみんな外国に行きたかったんだけど、でもお金がないから」と語り、家族も喜んで日本への進学を後押ししたと振り返る。また、オーストラリアやニュージーランドに行く機会があっても日本へは行けなかったと話す。教育費等を賄ってもらえる環境が日本にあることが来日を選択した主因と話す。

・大学留学中

最初の1年間は先輩たちと同様に、日本語の別科で勉強した。「日本語の勉強だけ結構つまらない。1年間はちょっと」と強調した。その後、4年間大学で過ごすなか、D氏と共にラグビー大学選手権3度目の優勝に貢献した。

・就職のきっかけ

E氏は、「トンガも考えてました」と勉強を第一に考え、そして先生になりたいという目

標は日本に来て変わらなかった。

そこで、トンガで就職するか日本に残るかを当時の監督に相談した。日本に残ればどのような会社がよいか親身になって考えてくれたと話す。悩んだ結果、日本で就職する事にした。

・就職（競技継続）

会社では、正社員として働き仕事後にラグビーの練習を行った。「ラグビーは4年間ですよ。試合に出たのは1年目だけです」と話す。2年目以降は、プロ契約選手が主に試合に出ており自らは次第に競技に力を入れなくなった。「プロにはお金いっぱいから払うから」と、会社のラグビー部は、プロ契約選手が主体となった。

仕事では、専門的な日本語の理解に苦しんだが職場の研修や同僚の助けがあり乗り越えられた。

・競技引退後

トンガに帰国することは考えなかった。この時、結婚し子供も既にいた。「子供の将来も考えて少しこっちに残って勉強もさせる」と語る。子供は、「お父さんラグビーやってたんですか？」と、引退が早かったこともあり父がラグビー選手であったことは覚えていなかった。E氏は子供達に勉強とスポーツの両方をするように話をしている。そして、日本の大学で学ばせたいと語る。

一方、プロ契約が出来るようになり徐々にトンガから来る留学生は、勉強が目的ではなくお金に焦点が移っていると話す。また、高校・大学で日本へ留学する者と、社会人からラグビー選手として契約し来日する者では、素行の面でも大きく異なると語る。

・日本で生活する上で必要な要素

大学と会社で使う日本語は全然違うため、より専門的な勉強をする必要があると話す。ま

た、ビザの更新は大学や会社の手伝いがあり他の外国人と比べて苦労はしなかった。帰化したのはつい最近の事だと話す。

・今後について

子供にしっかりと教育させたい反面、養育費を一人で賄うことが難しいと話す。日本からのODAでトンガは活性化していると語る一方、もっと教育関連に税金が投入されることも望む。

また「定年後は、今度はトンガに帰りたい」と、話す。

6. F氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

F氏は、叔父がプロボクサーであった事もあり、ボクシングに興味があったが、それ以上にラグビーに魅了されていた。なぜなら、「トンガでは、男と言えばラグビー、他のスポーツをやるとお前オカマか？と言われるぐらいラグビーが有名」であるからと言う。

また、A氏やC氏が日本でラグビーを頑張っている姿を見ていた事もあり、私もラグビー選手になって、いつか生計を立てられるようになれば、という思いが募り、ラグビー一筋で頑張った事を話す。

・留学のきっかけ

F氏は、当初オーストラリアのラグビーリーグに行く事を希望していた。また、父もすぐにプロになれるオーストラリア行きを進めていた。一方で、母は、大学に入学できるチャンスがある日本を強く勧めた。

そんな中、大東文化大学から留学の誘いが届いた。留学の決め手は、やはりラグビー選手として、憧れの強かったA氏やC氏がプレーする日本に行ってみたい、という気持ちが強くなったと振り返る。結局、両親、家族も喜んで送り出してくれた。

・大学留学中

F氏は、トンガ王国から来日した当初、大学内で日本語を1年間勉強する必要があったため、1年間ラグビーができなかった、と当時を振り返る。そして、学校では漢字や文法の作成まで勉強した。当時、F氏は寮で生活していたこともあり、周囲の日本人や友達との会話、さらには意味が分からない日本のテレビを視聴する事により、少しずつ日本語に触れていた。

また、「学生時代から母国に戻るという選択肢はなかった」とF氏はいう。ただ、日本に

残るためには社会人チームに採用される事が必要だが、そのためには努力を続ける事が大切だと、自分自身も思っていたし、周囲からもアドバイスをされていた。

・就職のきっかけ

F氏は、大学卒業後、母国に帰国するという選択肢はなく、日本で仕事をしようと考えていた。プロ選手と会社員という道があったが、プロはレベルが高く、プロになってから多大な努力を要する事が予想できた。また、日本で仕事を続けるためにも正社員として入れるメーカーを選択した。

・就職（競技継続）

F氏は、最初、メーカーに正社員として入社した。当時の様子を以下のように語った。
「朝起きて、会社行って、4時半まで会社で帰って来て、7時から練習、夜の9時まで練習で、ご飯食べてお風呂入って、すぐ寝て、またすぐ会社みたいな」と振り返る。入社して1年間はほぼ研修で、2年目から本部に配属になり海外を対象とした仕事を担った。ラグビーをしながらではあったが、仕事レベルについては周囲との差を感じていた。

・競技引退後

いずれは引退するにしても、次に何をしたいかという事は深く考えていなかった。ただ、正社員として会社に残って仕事をする人やスポーツエージェントをしている人、退職して自動車整備工場を経営する人など、先輩方を見ていると、自分も大学を卒業しているし、日本でどうにかかなりそうなことは分かっていた。だから、現役の時はラグビーだけを一生懸命やる事に集中していた。

もともとトンガから直接来日する人は、帰国を考えていない。トンガでは仕事もないし、国の家族に仕送りをするためにも日本にいる事は必要だと、F氏は考えている。

・日本で生活する上で必要な要素

一言で言えば、日本語力。日本語を話せる事は非常に重要な要素だとF氏は考える。「やっぱり、言葉は大きいね。僕も今ここまで日本語をしゃべれなかったら、コーチもできないと思うし。結局、コーチでもできるんだけど、例えば、通訳を入れたりとかすると、またややこしい。多分会社は、そんなんやったら、しゃべれるコーチが欲しいと思うし」と、F氏が語るように、通訳というワンクッションがなくても意思の疎通が図れるという事は、仕事の上で非常にプラスになる。

また、自分自身が日本社会に溶け込み、楽しんで生活できるようになるためにも必要であるし、トンガにいる時から日本語に触れる機会があれば、なお良いとF氏は考える。

・今後について

F氏は、自分が先輩方のおかげで来日する事ができ、ここまで来る事ができたので、これからは自分がラグビーやトンガ王国の役に立ちたいと考えている。現在のコーチとしての活動は、ある意味ラグビーへの恩返しである。

ただ、ラグビーに限らず、トンガ人に可能な仕事をあつせんする、といった仕事をする事で、トンガ王国から日本への架け橋になりたいと考えている。

7. G氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

G氏の父は、一家の生計を支えるために、単身でニュージーランドに渡り、仕事をしていました。その後、G氏以外の家族もニュージーランドに渡ったが、G氏は祖母の下に残った。

また、幼少の頃から英語を習ったと話す。その後、トンガ王国全土で行われる高校入試を受け高校に2年通い、ラグビーをしていた。そして、高校3年時には、ニュージーランドに渡る事になった。

その際、G氏が通った高校は、「凄いのは皆、エリートなんですね」と語るように、オールブラックスの選手が一番多いと言われるほどのラグビーの強豪校であった。

・留学のきっかけ

G氏は、兄であるD氏が、日本でラグビーをしていた関係で自身も日本に行く機会があれば、と希望していた。そして、G氏が高校生の頃、大東文化大学ラグビー部監督がプレーを見て気に入られた。「大東文化から声かけられて、もう日本に来る道ができたと言うか、決まった」と当時を振り返った。

もともとラグビーというスポーツの身体的な危険度を強く意識していたG氏は、ラグビーができなくなった後の選択肢を重要視していた。他の国では得にくい、ラグビー留学で、勉強できる環境が得られる日本は、非常に魅力的であった。G氏も「まずは、勉強ができるという事。将来的にラグビーもできて、卒業した後に、プロという道もあるし、サラリーマンとして日本人と一緒に、仕事する事も選べる」と語るように大学在学中から兄と2人で勉強の重要性をよく語り合っていた。

・大学留学中

G氏もまたトンガより来日した1年目は大学内で日本語の勉強をし、公式戦に出られな

いながらもラグビーの練習をしていた。そして翌年大学に入学した。

また、G氏は、トンガ王国に帰国するつもりはなく、「むしろ、その大学でしっかり勉強して、日本の企業でラグビーしながら仕事する」という希望があった。

・就職のきっかけ

G氏は、自ら探した企業への就職を検討していた。そして、仕事しながらラグビーをするか、プロになるかの決断ができずに悩みを抱えた時期もあった。

しかし、メーカーから声をかけて貰ったことをきっかけとして、セカンドキャリアも見据えていた。会社として規模が大きく、今後、ラグビーの成長が見込めそうな同メーカーを選んだ。

・就職（競技継続）

プロ契約であれば契約金が大いし、帰国時に大金がある事になるが、先の保証はない。実際、帰国した人も今は何をしているか分からないと話す。正社員であればラグビーができなくなっても、勤続する事で給与の上昇と保証がある。また先を通して考えると、プロ契約より稼ぐ可能性があると考えた。

また、今まで取り組んで来た事、人間関係を継続できるという意味でも、正社員として働けるという事は、「自分の仕事に集中できる環境にいるということ」になると語った。

・競技引退後

G氏は、就職時、正社員として仕事をしながら、ラグビーができる環境を重要視した。その理由として、引退後も会社に残り働く事ができることを挙げた。一方、プロの選手として契約した場合、契約が終わり次のチームが見つからない場合やコーチとして残る事ができない場合、「自分ではコントロールできず帰国する道しか残されていない」と語る。

- ・日本で生活する上で必要な要素

選手であれば、周囲から衣食住について良いサポートを受けられる事が多い。「これを当然の事と思わず、感謝してそれを力に変えること、そして、その力を周囲に還元する事ができている実感はなくても、ひたむきに一生懸命に頑張る事が必要」と語った。

- ・今後について

現役時代、妻と子供達が一生懸命応援してくれていた。そして、G氏が留守の間、妻が家族のために頑張ってくれていた。これからは、「家族のために仕事の面で頑張っていきたい」と語った。また、「日本は頑張れば頑張っただけ評価してくれる所なので、社長とまでは言わないまでも、常に向上心をもってラグビーで培ったリーダーシップを仕事の面でも発揮していきたい」と語った。

また、スポーツ留学で来日している学生等に対して、「特に日本のラグビー界の留学生に向けては、考え方や生き方についての勉強会を実施して、それを普及していきたい」と言う。

8. H氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

生活は苦しかった。H氏は、父親が一生懸命働く姿を見ていた。貧しいのはトンガ王国では決して珍しくない。ただ、そんな環境下でも「育ててもらった」と語る。そこで小さい時から親孝行をしたいとの思いがあった。トンガ王国では仕事が少なく、給料も決して良くない。両親からは、生活が厳しかったこともあり、勉強をしっかりとるようにと言われていた。また、小学校から英語教育が始まり熱心に勉強したと話す。

しかし、H氏はラグビーが盛んな高校に通い、U-19 トンガ王国代表メンバーでもあった。そのため、「ニュージーランドやオーストラリアとか一番近い」と話すよう、海外でラグビーをし活躍することで親孝行をできればと考えていた。

・留学のきっかけ

大東文化大学からH氏のもとに留学の勧誘があった。そこで日本という選択肢が出て来た。また、同大博士課程を卒業し、トンガ王国の大臣に就任した経験がある方からの誘いもあった。兄弟がニュージーランドに在住していたこともあり、H氏は、ニュージーランドも選択肢の一つとして考えていた。ただ、ラグビーの競争は激しかったと言う。しかし、同大学は、学費を全額賄ってくれるとのことで留学を決めた。

・大学留学中

先輩たち同様1年間日本語の勉強をした後、入学した。また、生活費を部から少額支給された。H氏は、「家族の生活が厳しかった」と在学中に定期的に実家へ、部から支給された生活費からいくらか送金した。

H氏は日頃から、「4年間の後どうしたらよいかと不安があった」と語る。また、日本に來た理由をしっかりと考え続けていた。それは、しっかりラグビーで活躍しないとどこからも勧誘されないと先輩から常々教えられていたからと話す。

・就職のきっかけ

ラグビー部の監督もトンガからの先輩たち同様就職先探しに一生懸命になってくれた。その際、B氏もエージェント関連の仕事を海外で営んでおり就職先と掛け合ってくれた。

また、トンガに帰国する気持ちはH氏にはなかった。日本では22歳で大学卒業するのに対して、H氏は24歳であった。トンガに戻ると、せっかく日本の環境に慣れ日本語も習得しラグビーでも活躍できる環境を捨てることになると考えた。更に、「安定とか将来のために」との視点からもトンガではなく日本を希望していた。

・就職（競技継続）

H氏はメーカーに正社員として就職し、ラグビーは業務後に行った。しかし突如、会社の方針でラグビー部に力を注がずクラブチームとしての活動に変更すると伝えられた。この会社に勤めて4年目の出来事だった。H氏は、「どうしてもラグビーしたくて移籍しました」とラグビー選手としてプロ契約を結べるチームに移籍をした。また、H氏はこの頃、プロ契約の社員が散見されるようになったと感じた。

プロ契約の選手として新天地で再スタートした。H氏は、他チームで活躍していた先輩のF氏が、後に移籍してきて再び大学以来のチームメイトになった。H氏は、とてもF氏を慕っていた。共に切磋琢磨しチームのために努力を続けた。怪我の痛みに堪えながらも試合で頑張った。それは、周りの期待に応えたかったからである。

しかし、契約更改時に思うような評価をたびたびしてもらえなかった。そして、このチームを去ることを決意した。また、1人で契約更改に臨むのは難しかったと振り返る。この時、既に重症を抱えていたために入院した。

F氏も怪我を抱えており偶然にも、同じ病室に入院してきた。これからどうしようかと悩んでいたH氏は、対面のベットにいるF氏に悩みを打ち明けた。F氏は、契約交渉に欠かせない日本人の代理人を紹介してくれた。

退院後、代理人を通して社会人クラブチームへの入団が決まった。東日本大震災で甚大な被害を受けた地域にあるチームである。現在、H氏は現役選手としてクラブチームのために戦い、来シーズンのトップチャレンジリーグ（仮称）参入に貢献した。

私生活では、数年前に結婚し子供も授かった。妻は、同じトンガ人である。しかし自身は既に日本に帰化している。トンガ王国への仕送りも定期的に行っている。

・日本で生活する上で必要な要素

H氏は自身の経験から、「日本の中で文化違うけど慣れていかないと」と話す。また、「何で日本に来たのか忘れずにやってゆく」ことが大事であると考え。大学生まではチーム関係者が私生活の面までサポートするが、社会人になると誰も私生活まで面倒を見ないため、自分で考えることが大切と言う。

・今後について

「来年契約があるかわからない」と俯いた。1年毎の契約更新のため、今後は非常に心配で毎日将来について悩んでいると語る。しかし、今はチームのために全力で頑張り貢献したいと考えている。また、競技引退後は、ラグビーに関わる仕事を希望している。そのためには、資格や日本語など勉強が欠かせないと自覚している。

一方で、様々な理由で帰国する留学生を見て来た。「日本に来てチャンスを潰したということは僕から見たらもったいない」と話す。それは、日本への留学を希望する人は沢山いるが、留学のチャンスはほとんどの人が得られないと考えるからだ。不祥事等起こして帰国せざるを得ない人も見て来た。後輩達が、日本へ留学のチャンスがあれば、自身のためだけでなく、家族や親戚のためにも頑張ってもらいたいと願っている。

次に、上記 8 名のライフストーリーを補完すべく行った 4 名のインタビュー内容を、以下に記述する。大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏、1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific の Sione Taumoepiau 氏、トンガ王国ラグビー連盟 CEO の Feao Vunipola 氏、同連盟前会長の Epi Taione 氏である。

9. 大東文化大学ラグビー部特別顧問 鏡保幸氏

・トンガ王国からの留学生について

1980 年に初めて受け入れてから現在に至るまで 37 年間、一貫してトンガ王国からのラグビー選手を受け入れてきた。トンガ王国から大東文化大学への受け入れは「そろばん」をきっかけに始まった。ただし、「ラグビー」での貢献が多大であった。勿論、ラグビーと勉強の両立を重視して受け入れを行った。中には、同大学博士後期課程を終了し、トンガ王国通商産業観光大臣に就任した者もいる。

留学生を受け入れ始めて以降、A・B 両氏が礎を作り、C 氏が入学したことで大東文化大学が一気に強くなった。大学選手権も 3 度制覇し「トンガ旋風」を起こした。ラグビー留学生のパイオニアを作ったのは大東文化大学であり、現在の日本での外国人プレーヤーの活躍に大きく貢献したと考えている。

・留学生の日本での様子について

トンガ王国は大家族での生活環境という事もあってか、年上は年下が不自由しないようにしっかりと面倒を見る特徴がある。トンガ王国の留学生は、同大学で寮生活を始め部活動では和やかな雰囲気を出し、下手な上下関係が出来ることがなかった。日本人も留学生の率先した仕事ぶりを見習い、目上が率先して働き、下の者に対して手本を見せる環境が出来上がった。これは、現在まで変わっていない。実際に、留学生が主将になりチームを引っ張るまでになった。このことから、留学生の日本人からの信頼が高かったと言える。

また、ホームシックになった留学生もいたかもしれないが、日本人が率先して声を掛け合って悩みを聞き解決した。留学生は大学で、日本人学生から「ラグビー頑張れ」や「優勝おめでとう」の言葉をかけてもらうことで学校も楽しく行けている。みんなが応援して気にしてくれているので、「もっと頑張ろう」といった気持ちが起きている。そして、試合に勝つことで、さらに部活動を始め人間関係もスムーズに行ったと考える。

・留学生への指導について

褒める指導を徹底した。「その方法や考えはいいね」や「こんなやり方もあるけどどう？」といった、前向きな提案をする指導法である。パフォーマンスを発揮できるよう、明るいムード作りを心がけた。また、トップダウン方式の指導ではなく、選手自身が考えて戦略を練ることが多い。これは、日本人に対しても同じであると話す。

・留学生との卒業後の関係について

現在でも、日本人と同様にほとんどの留学生と連絡を取り合っている。実際に、日本人からは「トンガ王国からの留学生がいたから新しい発想が生まれ、試合に勝つことが出来た」や「楽しかった」といった声が、現在でも会合時などは聞かれると話す。

また、C氏から言われたことが嬉しい記憶として残っている。それは、2015年、皇太子殿下がトンガ王国訪問時、C氏の事を覚えて頂けていたと報告を受けたことである。教え子が過去に活躍した姿を覚えて頂けていたことは、これ以上の嬉しさはなく指導者としての自慢だと話す。

留学生が大学を卒業し、就職してからも周りの人に良い影響を与えているとの話をたびたび聞くと言う。これは、卒業した留学生が、日本社会に適応しようという努力があったからだと話す。また、相手の事を知ろうという姿勢もあるからではないかと述べる。

10. 1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific Sione Taumoeplau 氏

・トンガ王国の歴史や海外渡航について

遡る事 20 世紀初頭、トンガカレッジ高校とトゥポウ高校がラグビーの強豪校であり、定期的に対抗戦を行っていた。その盛り上がりは、目を見張るものがあったと述べる。昔は、イギリスの保護領だったこともあり、イギリスの文化が残っていると言う。ただ、紛れもなくトンガ王国では、「国技はラグビー」であると主張する。

現在 Sione 氏は、65 歳で長い間トンガ王国を見て来た。高校時は、ニュージーランドのラグビー強豪校に通い活躍した。また海外で仕事を立ち上げ、稼いだお金で家族に送金し家計を助けていた。

南太平洋のラグビーの歴史であるが、1950 年辺りからトンガとフィジーが活発化し、少し遅れ 1960 年以降サモアが活発化したと話す。

トンガ人が最も海外に渡航する国は、圧倒的にニュージーランドであるという。理由は、単に距離が近く、お金もトンガ王国より稼げるからである。

2 位は、日本である。理由は、お金を稼げることにありと思いがちであるが、先人が留学という独自のルートを作ってきたうえに、費用も全額賄ってくれ留学においては真っ先に選択するという。これは、そろばんを始め地道に外交を積み重ねてきた経緯があると言う。勿論、競技引退後、お金を稼げる国に間違いはないと話す。また、日本政府を始め、JICA も青年海外協力隊として活躍し、トンガ王国のために尽力し親しみを持つ国と語る。

3 位は、ヨーロッパ（イギリス・フランス・ルーマニア）である。理由は、ラグビーが本場に盛んであり、お金も稼ぐことが出来るからである。

4 位は、オーストラリアである。オーストラリアは、距離が近くお金も稼げる。ただ、ラグビーを考えると、多国籍の選手であふれかえる反面、活躍できるチーム数は多くないと言う。エリート選手へ特化した金銭等のサポートがなされると話す。

- ・トンガ王国と日本の交流について

そろばんをきっかけに、1970年代後半から急接近したようである。現在では、小学生はそろばんをみんなが習っている。そろばんは日本との外交の一手段であったと話す。現在では、そろばんの全国大会が行われるほどである。

日本からはそろばんを、トンガ王国からはラグビーを、お互い外交のツールにしているのではなかろうかと言う。現在でも、トンガ国王や日本の皇太子殿下など要人レベルでの外交が活発である。これは、両国が親密である証拠だと話す。

- ・日本への留学生について

基本的に、英語は幼い頃から学び、トンガ高校やトンガカレッジ高校の生徒は特に出来ると言う。12歳前後で、全国一斉試験を受けることになり、結果に応じて上位からレベルの高い高校に振り分けられる。日本の大学に行くには、ラグビーだけでなく、自然と勉強を頑張る習慣がついた者が選ばれるそうである。それは、引退後も見据えて勉強に取り組むからだと言う。また、ラグビーのみで生活出来るのは短い期間であることは、みんなわかっていると語る。

- ・トンガナショナルチームについて

国内組にトップ級の選手は少なからずいる。しかし、基本的には、ニュージーランドやオーストラリアで頑張っている選手を招集する。他国に帰化した選手や、一度でも他国の代表選手として試合に出場すると招集出来ないが、この点はみんな生活があるので理解していると話す。

11. トンガ王国ラグビー連盟 CEO Feao Vunipola 氏

・トンガ王国の国内事情について

トンガ王国に限らず、フィジー、サモアといったミクロネシア諸島は、出稼ぎの文化である。それゆえに、一家の中で数名が海外、特にニュージーランドやオーストラリアで働き本国に送金し家族を支援することは、昔も今も変わっていない。トンガ王国は、貧しい国であるため、国内に留まることなく海外で裕福な生活を送る人も多いと話す。

・トンガ王国と日本の交流について

昔、計算やそろばんがきっかけで日本との交流が開始したのではないかと話す。ニュージーランドやオーストラリアといった国々は、元々トンガ王国と距離が近く渡航していた人は多かったと言う。

ただ、日本の場合は、スカラシップを全額補助することから、海外に行きたい人は一番目に日本を選択するようになったと語る。ニュージーランドやオーストラリアでは、せいぜい半額程度の支援のようである。よって、留学出来ても途中で辞めてしまいトンガ王国に戻ってくる人が多いと話す。

・日本への留学生について

ラグビーでいえば、A氏、B氏やC氏の活躍が現在のルーツになったと言う。みんなが憧れるスーパースターになり、日本に行きたい高校生は沢山いると話す。「Rugby is national sport」と笑顔で言う。また、プロから日本へ行く人と高校・大学から行く人では、大きくタイプが違うと語る。

プロから行く人は、本当にラグビーのみで活躍する目的と話す。一方、学生から行く人は、引退後の仕事も意識して行く人がほとんどであると話す。スカラシップを狙っている人は、勉強が出来なければ、ラグビーだけでは日本に行けないため、自然とA氏、B氏やC氏

を目指してスポーツと勉強の両立をしよう。また、始めからラグビーのみではなく、勉強しかり他のスポーツ種目も万遍なく経験させると述べる。

また、5歳頃から全員英語教育を受けるので高校卒業の19～20歳くらいになると、誰でも仕事で使えるレベルには到達するという。こういう面では、海外に活動の場が増えている要因ではないかと考えている。

- ・トンガナショナルチームについて

海外勢を除いたメンバー編成になるという。しかし、能力のある選手が他国の代表になっても引き留めることはしない。それは、ラグビーは、仕事や家族など様々な要因の一つではないからと話す。

「日本に留学した選手は、まず帰ってこない」という。一方、ニュージーランドやオーストラリア、イギリスは、スカラシップの待遇が日本より悪いと話す。競争倍率も高いためキャリアの途中で、トンガ王国に帰国する選手も多い。「国内勢と帰国した選手を含めてナショナルチームを編成するため、ある程度の結果は残せる。No.1にはなれないかもしれないが」と述べる。

- ・その他について

現役時だけでなく、セカンドキャリアをどのように過ごすかを考えることが一番大事と話す。勿論、ラグビーで活躍するのは嬉しい。しかし、本人が納得のゆく道に、背中を押してあげるのが我々の役目と語る。

12. トンガ王国ラグビー連盟前会長 Epi Taione 氏

・自身の語り

優秀な生徒全体の 1%しかトンガ王国やニュージーランド政府から奨学金が貰えないと、海外進学は厳しい道のりだったと話す。自身は、トンガ王国における試験で優秀な結果を残すことができ後々、高校はニュージーランドで、大学はイングランドの大学に進学した。「勉強もしっかりやりながらラグビーに取り組んでいました」と述べる。ラグビーをプレーできる期間は限られているからと話す。また、「世界に出ると学歴が大事なことがわかっていました。大学では、先に役立つ経済学を学んでいました」と語る。

その後は、イングランド・日本・南アフリカ・フランスなどでプロ選手として活躍した。プレーや学歴が評価され、トンガ王国ラグビー連盟で会長やチェアマンに就くことが出来たと話す。また、妻が王族出身の方という。

・トンガ王国と日本の交流について

日本の皇太子殿下およびトンガ国王を始め、閣僚関係者が頻繁に往来するのは、ラグビーが大きく関係していると話す。自身も 2015 年、皇太子妃がトンガ王国訪問時、ラグビーについて直接会話をしたと語る。

トンガ人のほとんどは、海外留学や海外でプレーすることに関して強い情熱をもっているという。ラグビーは国のスポーツであり、これは、先輩方が海外で成功していることが大きな理由でもあると考えている。その中で一番人気がある国は、日本だという。日本に留学するためには、勉強とラグビーの両方が必要であると話す。「日本に行きたい気持ちの根底にあるのは貧しさ」と述べる。家族を養うには日本に限らず海外で働く必要があるという。

・日本への留学生について

「いつ」日本に行くかでその後のライフスタイルが変わるという。高校卒業後に日本へ留

学する人は、大学へ進学した後、就職（ラグビーを継続しながら正社員として働く）もしくはプロ契約になる人が多いと話す。これらの人は、日本で継続して生活することを望む傾向があると語る。その理由は、トンガ王国よりも日本での生活の方が長くなり、生活スタイル、人間関係、結婚、仕事など日本のスタイルに慣れる時間が長いからである。

一方、プロ選手として日本に行く人は、ラグビーのみで結果を残さなければならない。また、勉強をあまりしておらず人間関係も構築しにくく、周囲の支援体制が薄いと話す。よって、ラグビーのパフォーマンスが落ち契約解除になれば、日本で頼るすべがなくトンガ王国に帰国する人が多いという。

・トンガナショナルチームについて

1 流選手は、日本、ニュージーランド、オーストラリア、ヨーロッパにばらけるといふ。プロ契約の勧誘や大学進学勧誘を夢見ているトンガ人にとって、海外への誘いがあれば全員行くのではないかと話す。また、家族も応援するという。

そのため、トンガ王国代表チームは 1.5 流の人達でチームを組むのが精一杯との実状を明かす。ニュージーランドやオーストラリアでは、世界から集まる選手の割に、活躍するチーム数が少ない。更に、サポート体制もトップ選手にしか行き渡らないと話す。よって、多くのトンガ人を含め世界の人達は競争に敗れ帰国するという。帰国した、トンガ人がトンガ王国のナショナルチームの主軸になると語る。でも、日本が W 杯で活躍していて嬉しいと笑顔で話す。

・各国のシステムの違いについて

ニュージーランドやオーストラリアは、ラグビー協会が各プロチームに指示を出し、選手の育て方など細かく指導するという。そのため、各プロチームが単独で戦略を練りにくいと話す。協会の意向を酌まなければ、代表チームに選ばれないので協会の意見が強いという。

一方、日本やヨーロッパは、チーム独自やスポンサーの意向により選手の育て方を考えることが出来、チーム毎に戦略に違いが出やすいと話す。これは、日本やヨーロッパのラグビー協会は、各チームに介入することなくパフォーマンスが良い選手を代表に選ぶことになり公平な判断基準が整っているからという。育成中心のチームであったりエリート中心のチームであったりと各々戦略が違うので、一度チームを解雇されても別のチームに採用されることが多々あると語る。

・その他について

一番魅力的な国は、日本だという。費用を全額負担するなど支援体制が抜群だと話す。日本は、たとえ怪我をしたり勉強に詰まっても周囲が辛抱強く助けると語る。よって、日本に留学したトンガ人はほとんどが日本に帰化したり、永住権を獲得して帰国しないという。ただ、トンガ王国の家族には日本から送金や物資を送り支援すると述べる。

VI. 考察

前章においてトンガ王国から大東文化大学へのスポーツ留学生の、「来日前の状況」、「留学のきっかけ」、「大学留学中」、「就職のきっかけ」、「就職（競技継続）」、「競技引退後」、「日本で生活する上で必要な要素」、「今後について」の8段階に焦点を当て、各々のライフストーリーが明らかとなった。本章ではこれらの結果をもとに、各項目について考察をすすめる。そして各項目を総括するために、最後に考察のまとめを記載する。

1. 来日前の状況

トンガ王国は、西ポリネシア諸島に位置し、人口は約 10.6 万人、面積は 720 平方キロメートル（日本の長崎県対馬市とほぼ同じ）である。（外務省）国王によって統治され、敬虔なキリスト教徒が大半を占める島国である。農業で生計を立てており、輸入品に生活を頼っている部分が非常に多い環境である。

来日前のライフストーリーを確認すると、「生活」、「競技」、「勉強」に関するそれぞれの語りが得られている。

生活に関する発話において、ほとんどの対象から共通して、留学生の親が海外で働き本国の家庭へ支援をしていた事例が確認された。トンガは一般に離散社会と呼ばれる社会構造をとっており、国内だけでなく国外に出稼ぎに出て本国の家庭を支援する例は珍しいことではない。ニュージーランドが、外国人労働者を受け入れる施策を取ったことから、同国へ出稼ぎに行き易くなっており、物理的に近いニュージーランドに親が出稼ぎに行っていた者も多い。トンガ王国からのスポーツ留学生においても、こうした海外への出稼ぎなどを以前より身近なものとしてふれていた環境に身を置いていたことがわかる。

次に、ラグビーは勿論だが、サッカー、陸上など多種目を経験していた者が散見された。C氏は「ラグビー以外にもサッカーや陸上」に、D氏は「サッカー、テニス、ボクシングや陸上」に携わっていたように、来日前において複数のスポーツ競技をおこなっており、中に

は他競技での優秀な実績を残している人物も見られた。C氏やD氏のように、様々な種目を経験することでラグビーの素地を作り上げていたのではなかろうか。

また、勉強面では、様々な学校に通っているが、文武両道を掲げ、ラグビーだけでなく勉強も力を入れ、将来を見据えた考えを持っていたようだ。E氏のように、「お父さんは勉強が一番大事。よく言われていた」と述べたように、ラグビーで生計を立てるのは難しく、勉強することで道が拓けると幼い頃から教育を受けていたことがわかる。

2. 留学のきっかけ

本研究はスポーツ留学生を対象として論を進めているが、ここで改めてトンガ王国における留学の位置づけについて見てみたい。トンガ国王であるタウファアハウ・トゥポウIV世は、教育の必要性を奨励している。しかしながら、トンガ王国の教育環境は整っているとは言い難く必然的に海外の大学に進学せざるを得ない状況だったとの発話が得られている。

留学のきっかけのライフストーリーを振り返ると、以上のような社会的背景を前提に、海外に行きたいとの思いを抱いていた者が多いことが確認された。ただし、留学費用を賄うことが出来ない家庭環境からの葛藤について述べている者も見受けられる。実際に、E氏は「本当はみんな外国に行きたかったんだけど、でもお金がないから」と語っている。そのため、海外の大学へ進学するにあたり、トンガ国内の奨学金や南太平洋地域の大学への奨学金を申請もおこなっている事実も語られている。しかし、結果として、全員が大東文化大学から得られた留学費用負担による勧誘により留学を決断していることがわかる。

この一連の背景において、留学費用を賄って貰える点が、日本への留学を決定づける点において大きな要因であったと考える。一期生であるA氏は「留学費用の支援がなければ留学は出来ない環境」との内容を話している。一方、金銭面でのフォローだけでなく、大学での学問的興味があった点は見逃せない点として挙げられる。G氏は「勉強ができるという事。将来的にラグビーも出来て」と述べるように、ラグビーだけでなく勉強も出来ることが同大

学への進学の手決め手としている。

留学するにあたり、家族から離れる事になる。F氏は「両親、家族も喜んで送り出してくれた」との内容を話している。家族に相談を持ち掛けた様子も垣間見えており、家族の理解が重要な要素であったこともわかる。前項で挙げた「生活」、「競技」、「勉強」の各要素に対して、留学先の大学からの金銭的フォローが得られたことにより、留学への行動を具体化することができたプロセスが示されている。

3. 大学留学中

本研究の対象とした大東文化大学は、1980年よりトンガからの留学生を受け入れている。その始まりは、1976年同大学名誉教授の中野氏がニュージーランドを訪問中、トンガ王国に足を運んだ際のことである。タウファアハウ・トゥポウIV世から「算数の学力向上のためにそろばん教育に力を貸して欲しい」と面会にて依頼されたこと（2015年6月28日 毎日新聞朝刊）に遡る。

中野氏は、そろばんにおける日本国内の権威でもありトンガ国王との面会をきっかけにトンガ王国でのそろばん普及振興に力を入れていた。

当初トンガ王国側は、国内でのそろばんの更なる普及のために、同大学への留学生が帰国し、そろばんそのものがトンガ王国において広がることを期待して交流が開始されたようである。

一期生であるA氏からH氏まで全員が同大学に入学する前、日本語を1年間勉強している。入学するためには必要だったと語っており、他国からの留学生と一緒に授業を受けていた。これは、日本の生活に馴染むうえで必要だとの同大学の意図があったと考えられる。A氏の「日本語がわからず周りの人と満足に話すことが出来なかった」との内容の発言や、C氏が「ホームシックもあった」との発話からも、1年間では、日本語や文化を始め生活に馴染むことは難しかったと思われる。しかし、最低限必要なスキルを身に付け大学に入学する

ことは、後の生活で少しでもスムーズに過ごすために有効だったと言えるであろう。実際に、F氏は「寮で生活して、周囲の日本人との会話により日本語を習得した」旨を述べている。また、全員がラグビー部の中心選手として活躍するに至っていることが語られている。

一方、F氏は「学生時代から母国に戻るという選択肢はなかった」や、G氏は「大学でしっかり勉強して、日本の企業でラグビーしながら仕事する」と述べたように、大学在学中に既に日本で生活することを決めた者も多数みられた。これは、トンガ王国が離散社会であり、実際に家族がニュージーランドなど海外から本国へ仕送り等の支援をしていたことも影響していた可能性が示唆される。

留学の意図として、大学は留学を通じたそろばん普及など副次的な効果も見込んで留学受け入れをはじめたが、ラグビー選手としての留学生の活躍や、トンガ王国の離散社会を背景とする帰国意識の希薄さにおいて、必ずしも当初の目的を達成するには至っていないことがわかる。一方で、留学を通じた日本企業への就職などを視野に入れた、スポーツへの取り組みが、トンガ王国出身の留学生にとって上手く適合していることがわかる。

4. 就職のきっかけ

同大学と近くに所在するメーカーは、定期的に練習試合を行い交流があったという。双方の監督同士で就職についての話し合いの場が設けられていたようである。就職のきっかけのライフストーリーから、同メーカーに就職が決まった者、また自らが望む会社を探した者、更には母国に帰国することを視野に入れて悩んだ者、に分けられる。しかし、結果として全員が日本に留まる事を決断している。また、全員が正社員としての採用を希望していた事も明らかになった。

研究対象の最年長であるA氏は「戻ったって公務員以外会社とかない」と述べ、年齢的に中間付近に位置するD氏は「産業がない」と述べ、更に最年少であるH氏は「安定とか将来のため」と述べていることから、トンガ王国における就職口が少ない現実を、目の当たり

にしていたからだと思われる。また、時が過ぎても就職先が少ないことには変わりがないように思われる。多くのトンガ人が海外に出稼ぎに行っていることと同じく、日本での就職を捉えていることが見て取れる。

5. 就職（競技継続）

A氏が就職した1985年からH氏が就職した2005年では、20年の開きがある。この間日本経済は、1980年代初頭から安定成長を続け、1985年のプラザ合意以降バブル景気が訪れた。しかし、1990年代初頭にバブルが崩壊し、同後半にはアジア通貨危機のあおりを受け大手金融機関が破たんするなど、この20年で経済状況は乱高下した。

このような状況下であったが、就職や仕事に関しては各々順調に進んでいたようである。また、正社員として働きながらもラグビーを続けている。ただ、仕事で使用する日本語のレベルに戸惑った者や、仕事内容を理解するのが難しかった者もいる。

競技面では、ワールドカップを始め日本代表で活躍した者も多く、大学を卒業してから更に競技力が向上したことがわかる。

一方、ラグビーをしながらも引退後も意識していた者がみられた。C氏は「引退して何をするかを考えて」と述べており、E氏は「試合に出たのは1年目だけ」と述べてプロ契約選手が主体になってきたとも話す。インタビューした者の中でも、移籍した先の会社ではプロ契約でラグビーに打ち込んでいたとの語りが聞かれている。

また、ビザについて様々な語りが聞かれた。日本に現在も在住する7名中A氏を除く、6名が日本に帰化した。C氏は「日本に子供たちが学業に取り組んでいて」と家庭環境の面から述べており、D氏は「帰化すれば別に規制もなく日本人として出れる」と競技環境の面から述べる。A氏については、ビザを更新して行く中で永住権を獲得できたため帰化はしていない。

一方、B氏は日本で就職したものの、数年後海外支社に進んで異動した。日本での留学か

らの就職をキャリアパスのスタートとして捉え、更なる新天地へキャリアを移していった例として興味深い。

6. 競技引退後

ここでは、競技を継続しているH氏を除く 7 名を対象として考察を進める。ライフストーリーを見返すと、この地点で、母国に帰りたいとの話は見受けられなかった。発話の詳細などを確認するうえで、日本の生活に馴染めていることや家族が出来た事の影響が考えられる。一方で、母国に帰国した者に関しては、プロ契約についての言及が見られた。C氏とG氏は「契約が切れると帰国」の旨、述べている。これは、プロ契約選手は契約更改が頻繁に行われる。しかし、契約解除や満了すると直ちに失職する。そのため、正社員と異なり長いスパンでの滞在がしにくい。よって、ビザの更新や帰化するための条件に達しない者がプロ契約選手には多いのではと考える。

また、「恩返し」、「感謝」、「社会貢献やラグビーに引き続き携わる」旨の語りが、多く見られた。

A氏は「トンガの家族を学費など支援し助けます」と述べるとともに、これまで支援してくれた方に恩返しとしての支援について述べている。母国のラグビー選手にも物資を提供するなど具体的行動についても触れられている。

C氏は「ラグビーを通して仕事できているし感謝している」と述べ、現在は営業に携わりラグビー関係の会社が主な取引先である。また、仕事をしながら同大学ラグビー部監督やアドバイザーにも就任した。今は、自らがトンガ王国に渡り留学生を勧誘する立場におり、後輩達に自分の軌跡を伝えている。更に、「我々がその道を開けた」と日本ラグビー界に外国人が入る素地を作ったのはトンガ王国からの留学生と語気を強めている。

D氏は「連れてこれてありがとう。なんか嬉しかったなあ」と述べ、ボランティアで現在は高校生を指導し、ラグビーの日本代表選手を輩出するなどラグビーを通した社会貢献を

している。

7. 日本で生活する上で必要な要素

日本で生活する上で必要な要素についての発話が全ての対象者から多く得られたことから、カテゴリーとして抜き出して以下にまとめた。ライフストーリーから、「勉強」、「ビザ」、「支援体制」、「地域住民」との関わりといった点が挙げられる。

勉強について、B氏は「日本にいるなら日本語で、ビジネスでも堂々と向き合う」と述べ、C氏は「日本語しないと。社会人と大学は違う」と、社会人として必要なレベルの日本語の習得の必要性を説いている。また、A氏は「プロ契約でも資格の勉強をする」旨を述べた。日本で生活する上で欠かせない要素であると考えていることがわかる。

ビザについて、A氏とD氏は「ビザの簡略化」と同じ内容を述べた。規制緩和がなければ外国人が日本で生活するのは難しいと述べている。特に、A氏は帰化せず永住権を取得しているため、相当な苦労があつての発話とも考えられる。

支援体制については、D氏は「日本の教育機関が責任もって勉強する環境を提供する」と、受け入れ側がスポーツだけでなく、日本で生活するスキルを身につけさせないと就職後に苦勞する旨の発言があつた。これは、職場で人事関係の仕事に携わっているD氏が日々職務上肌で感じ取っているからではなかろうか。

地域住民との関わりで、A氏は「やってみたかったんだよね」と自治会長を務めたことを述べ、C氏は「隣組といつかね、そういうの」と定期的に会合に参加しており、両氏とも積極的に地域住民と交流を重ねている。

一方、かつて留学生でサポートを受けた観点から振り返るG氏は「これを当然と思わず、感謝し周囲に還元すること」と、強調している。

8. 今後について

現在、日本で生活している者が7名、海外で生活している者が1名の計8名となっている。

印象的な語りは、日本で生活している数名が「トンガ王国に帰りたい」と述べたことである。特に「ゆっくりしたい」との言葉は、人生の大半を異国の日本で忙しく過ごしたため、母国での生活が懐かしく、居心地が良かった故郷を忘れていないとのことであろう。

他には、B氏やF氏は「日本とトンガ王国の架け橋」になる旨を話しており、G氏は現役時代を振り返りながら「家族のために仕事を頑張る」、といった語りなどが見られた。家族のためや周りのために役に立ちたいと考えていることがわかった。

現役選手であるH氏は、毎年所属クラブとの契約更新が気がかりでありインタビューでもプロの厳しさを語ってくれた。また「日本に来てチャンスを潰したということはもっていない」と、トンガ王国から留学することが厳しい現実を再度主張してくれた。彼もまた、家族や親戚のために頑張ると述べている。

9. 考察のまとめ

前項までの考察をまとめるうえで、いくつかのキーワードで示すことができると考えられる。それは、「離散社会」、「金銭的サポート」である。

複数の対象者から得られた発話より、まず、日本からはトンガ王国にそろばん教育を推進させ、トンガ王国から日本はラグビーが有能な学生を受け入れていることがわかる。トンガ王国との交流は必ずしもスポーツを通じた交流がきっかけではなく、そろばんという日本文化を通じて緊密な交流が始まったことに注目したい。発話の中からも、そろばんを通じた交流が1970年代後半より始まり、これらをきっかけとして、以降、日本へ留学・就職した者や、ラグビー選手として社会人から来日した者が、トンガ王国の家族へ送金するなどの例が挙げられている。日本との交流以前は、物理的に距離に近いニュージーランドなどへ多く

の家族が出稼ぎに行っていたことも明らかとなった。

北原ら（2009）はこうした家族全体が出稼ぎに出るなど離れた場所でそれぞれ経済活動をおこない、支援するような家族の在り方についてディアスポラ（離散）社会との言葉で説明している。トンガ王国は、この「離散社会」という社会構造を取っており、今回調査を行った対象者も大きく関係していると考ええる。発話から得られる離散社会の特徴として、例えば、幼少の頃から英語教育が始まり、そろばんに携わり、日本の中学校受験の頃には、トンガ王国全土で今後の進路を大きく左右するテストが実施されるなどの発話が得られている。またこれらは、日本を始め海外で成果を上げるための教育体制と読むこともできる。各ライフストーリーから、トンガ王国が勉学に比重を置いているとの発話を得られている。これらは将来の就職を見据えての施策ではないかと考える。実際に具体的発話のなかでも、「プロ契約ではなく正社員」や「家族を助ける」など、実際に勉強をおこなったうえで、本国の家族支援に繋がる留学先での就職に関わる事柄も示されている。留学における勉強や学生生活は、それ自身が独立したライフイベントにとどまらず、留学先での就職などに繋がるライフストーリーの一部であることがわかる。

次に「金銭的サポート」について、本研究対象の留学生は、物理的に近いニュージーランドやオーストラリアではなく、遠く離れた日本を選択した。この理由は「日本は他国と違い学費等を全額負担する」ことが挙げられる。ライフストーリーからも、「留学費用の支援」についての発話がある。金銭的に問題がなければ、トンガ王国に残らなくても家族を始め多くの者が喜んで送り出す姿勢についても発話から得られており、先述の「離散社会」が根底に大きく影響していることがわかる。

上記の考察のまとめを裏付けるうえで、2016年11月6日に秩父宮ラグビー場にて大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏に、2016年12月29日～31日にかけてトンガ王国に渡航し、トンガ王国ラグビー連盟CEOの Feao Vunipola 氏、同連盟前会長の Epi Taione 氏、そして、1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific の Sione Taumoepiau 氏

の3名に話を聞くことができた。

考察のまとめでは、複数の対象者から、日本からそろばん教育をトンガ王国に推進させた旨記載した。実際に、大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏は「大東文化大学へのトンガ王国からの留学生の受け入れは、そろばんがきっかけだった」旨を述べている。これは、同大学名誉教授の中野氏が1976年トンガ王国に渡航し広めたとの新聞記事と同じ内容が聞かれた。

離散社会に関して、トンガ王国では、幼少の頃から英語教育が始まるなど、将来海外で活躍する上で勉学に比重を置くことが、不可欠な教育体制である旨を記載した。実際に、トンガ王国ラグビー連盟CEOや前会長は「テストの良し悪しで、進学する学校のランク付けが行われる。将来を左右するテスト」の旨を述べている。これは、トンガ王国では、勉強に対する考え方が幼少の頃からシビアである可能性が高く、家族もシビアな世界を経験していることから、なお一層教育に熱心である可能性が示唆される。更に、トンガ王国ラグビー連盟前会長や Sione Taumoeptia 氏は、「ラグビーは短命であり、勉学は引退後のキャリアを助ける」との旨述べた。就職や仕事に対する姿勢からとの内容が読み取れた。私は、トンガ王国を訪問し本島を一周したが、「産業が少ない」ことを実際に目の当たりにし、国内の就職事情は著しく厳しいと理解した。

また、金銭的サポートに関して、日本は全額留学費用を負担する反面、他国では日本よりも待遇が薄い。そのため、物理的に近い国々より日本を選択する旨記載した。実際に、トンガ王国でインタビューした3名全員が「日本は、留学費用を全額補助するため一番目を選択する」と話す。また、トンガ王国ラグビー連盟CEOは「ニュージーランドやオーストラリアは、せいぜい留学費用の半額程度」と述べ、Sione Taumoeptia 氏は「オーストラリアは各国から多くの選手が集まり、競争倍率が高く、金銭的支援はほとんどエリート選手だけ」と話す。

考察のまとめでは特筆しなかったが、大変興味深い内容も聞かれた。トンガ王国でインタ

ビューした3名全員が「Rugby is national sport」と述べており、ラグビーは国を代表とするスポーツである一方で、ラグビートンガ王国代表にトップ選手は少ないと話す。W杯等世界規模の大会に常連の国ではあるが、あくまで日本やニュージーランド、オーストラリア、ヨーロッパで代表になっていない選手で構成をすると国内での代表選手の実状が示された。この点に関し、「なぜ海外勢を呼び戻してナショナルチームを編成しないのか。もっと上位が目指せるのではないか」との旨、質問したところ、「彼らは、他国で家族と住んでおり仕事にも就いている。我々は、1度でも他国の代表に選出されれば彼らを喜んで応援する。それが、トンガ王国」と述べ、「個々の力は落ちてしまうが、全力でプレーする。No.1にはなれないかもしれないが」との意見をいただいた。「日本でA氏やB氏、C氏が活躍したがる？彼らが、日本で活躍するルーツを作った。トンガ王国で彼らを目指す人は多い。また、日本のラグビーがW杯等で成績を残して嬉しい」とも述べている。

通常であれば、自国の戦力が一番になるように編成すると私は考えていた。しかし、トンガ王国では、自国民が他国で成功していることを喜んでいる。その結果、他国が自国より強くなっても、トンガ王国国民がサポートしていることを心から喜んでいる姿勢がうかがえた。競技力強化施策など日本国内にとどまらず、国際的なスポーツ政策において、自国の強化が当然とされるなか、トンガ王国においては他国の競技力強化に自国の選手が関わることに理解を示していることは、特筆に値するものと考えられる。

VII. 結論

1. 本研究の結論

トンガ王国は、離散社会であることから歴史を通してみるとニュージーランドを始め海外に出稼ぎに行き、本国の家族を支援することが示された。

そして、本研究において、日本における外国人スポーツ留学生の来日前から来日後現在に至るまでの実態を、大東文化大学とトンガ王国に着目し、ライフストーリーを通して明らかすることが出来た。

2. 研究の限界

本研究では、より詳細なライフストーリーを読み解くためにあえて、トンガ王国から大東文化大学へのスポーツ留学生に焦点を当てた。そのため、他国からのスポーツ留学生については明らかとなっていない。

また、同大学留学のきっかけに関して、先人達のコネクションについて、助言を聞いたり、様々なメリットが存在したかについては明らかとなっておらず、更に、ライフストーリーを通して外国人スポーツ留学生が大学で学ぶことの意義や知識の習得について聞き取るまでには至っていない。

今後は、トンガ王国から大東文化大学へのラグビー留学生のみならず、他の大学や競技にも研究範囲を拡大し、外国人スポーツ留学生全体の把握に努める必要がある。

3. 実践への提言

これまで注目されてこなかった、外国人スポーツ留学生に焦点を当てることにより、国際交流などを通じた、新たなスポーツ政策の提言に繋がられる可能性がある。

また、本研究のように、離散社会が見られ日本に定住し働いてくれるような国や地域に焦点を当て、外国人留学生の受け入れを促進することで、日本の経済成長に貢献する可能性が

ある。そのためには、歴史的・文化的背景を知る必要がある。そして、移民政策を議論する上で離散社会にスポットを当てることで、新しい見方が示されると考える。更に、トンガ王国について、離散社会ゆえに出稼ぎなどにより国内経済が成り立つのか。それとも、出稼ぎなどに行き本国に金銭を送付することから、離散社会が成り立つのか。どちらの要因が大きいのかを把握することが求められる。

注

1. 2016 年 7 月 28 日、文部科学省高等教育局学生支援課へ電話にて問い合わせた。

謝辞

本研究を進めるにあたって、ご指導を頂きました主査の間野義之教授を始め、副査である武藤泰明教授、松岡宏高教授、上智大学の竹田陽介教授、明治大学の澤井和彦准教授に多数の貴重なアドバイスを頂きました。深く御礼申し上げます。

また、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科及びスポーツ科学部の間野ゼミ、そして武藤ゼミ、松岡ゼミに所属されている皆様には、様々な視点より本研究に協力いただきました。心より御礼申し上げます。特に、(株)スポーツファシリティ研究所代表取締役（同研究科博士後期課程）の上林功氏につきましては、本研究を進めるにあたり長期間親身に相談に乗って下さいました。

更に、インタビューに協力して下さった方々、大東文化大学ラグビー部特別顧問の鏡保幸氏、1st Civil Engineer in Tonga and the Pacific の Sione Taumoeptia 氏、トンガ王国ラグビー連盟 CEO の Feao Vunipola 氏、同連盟前会長の Epi Taione 氏、トンガ王国渡航にあたり全面的にサポートして下さった B 氏や現地で親切に受け入れて下さった皆様に感謝致します。

そして、仕事とは領域の違う分野の研究科へ進学することに理解を示して下さいました職場の皆様、ありがとうございました。

最後に、突然の社会人大学院進学の報告やトンガ王国渡航など、たびたび驚かせ心配をかけましたが、研究するにあたり応援し背中を押し続けてくれた父や母、厳しくも励ましアドバイスをしてくれた兄に、心より深く感謝致します。家族の理解や助けがなければ、本研究を始め怒涛のような日々を乗り越えることは出来ませんでした。

思い返せばこの1年間、これまでになく密度の濃い毎日でした。同期では最年少で、一回りも二回りも離れるみんなとうまくやっていけるか不安もありました。しかし、同期みんなと切磋琢磨し助け合えたことは、私の一生の宝物だと思っています。

引用・参考文献

- ・ ジャパンラグビートップリーグ規約 (2016)
- ・ 2015 年 6 月 28 日 毎日新聞朝刊
トンガ：そろばんが結ぶ絆 39 年前、日本人に指導依頼 交流今も 皇太子ご夫妻、来月訪問
<http://mainichi.jp/graph/2015/06/28/20150628ddm041040092000c/001.html>
- ・ 高井次郎. “〈資料〉 在日外国人留学生の適応研究の総括.” 名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科 36 (1989): 139-147.
- ・ 葛文綺. “〈資料〉 留学生の異文化適応に関する研究： 来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に.” 名古屋大學教育學部紀要. 心理学 46 (1999): 287-297.
- ・ 若生正和. “短期留学生の留学動機づけと進路選択に関するインタビュー調査.” (2014): 181-191.
- ・ 袴田麻里. “就職に必要な日本語能力とその支援： 元留学生への聞き取り調査をもとに.” 静岡大学国際交流センター紀要 5 (2011): 35-55.
- ・ 久野弓枝. “中国人編入留学生のライフストーリー研究 (1): 編入留学後の問題に着目して.” 札幌大学総合論叢 39 (2015): 63-73.
- ・ 久野弓枝. “中国人編入留学生のライフストーリー研究 (2): 進路決定要因に着目して.” 文化と言語: 札幌大学外国語学部紀要 83 (2015): 41-52.
- ・ 松本耕二, 野川春夫. “0220304 スポーツ留学生に関する研究: 外国人留学生選手の実態調査.” 日本体育学会大会号 42 (1991): 152.
- ・ 松元秀雄, 高橋直人. “外国人スポーツ留学生の日本の大学への受け入れの現状と課題: ラグビー選手に着目して.” 順天堂大学スポーツ健康科学研究 1.2 (2009): 214-224.
- ・ 三代純平. “セカンドキャリア形成へ向けた文化資本としての日本語.” 言語文化教育研究 12.0 (2014): 221-240.

- ・千葉直樹, 海老原修. “トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ.” スポーツ社会学研究 7 (1999): 44-54.
- ・Maguire, Joseph, and David Stead. “BORDER CROSSINGS Soccer Labour Migration and the European Union.” International Review for the Sociology of Sport 33.1 (1998): 59-73.
- ・北原卓也. “在日トンガ人ラグビー選手の日本社会でのポジション (特集 人の移動と環境の変化, そして多文化共生へ).” 環境創造 13 (2010): 131-146.
- ・小林真生. “多文化共生に向けた環境整備の重要性—トンガ人ラグビー選手の事例から付録: 大東文化大学とトンガのラグビー関係年表 (特集 人の移動と環境の変化, そして多文化共生へ).” 環境創造 13 (2010): 115-130.
- ・独立行政法人日本学生支援機構 平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html (2017 年 1 月 9 日閲覧)
- ・外務省 トンガ王国 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/tonga/index.html> (2017 年 1 月 9 日閲覧)
- ・ベズニエニコ, 北原卓也. “在日トンガ人ラグビー選手—グローバルな移動とスポーツ (ラグビーからみる世界).” 季刊民族学 33.4 (2009): 48-54.

付属資料

本研究には記載できなかったが、外国人スポーツ留学生のライフストーリーを研究するうえで協力して下さった、I氏および大学関係者に感謝するとともに以下に、I氏のスポーツ留学に係るライフストーリーを記載する。

I氏のスポーツ留学に係るライフストーリー

・来日前の状況

I氏は、「裸足で走ったりしていたから靴がなかった」とケニアにいた当時のことを振り返る。鶏が鳴く頃に起床し、山々へジョギングに行った。朝食のため帰宅した後、登下校時も遠い道のりを走って通った。練習時も、クロスカントリーや坂道を中心に走った。I氏は、「昔は厳しかった」と語る。

・留学のきっかけ

あるケニアのクロスカントリーの試合で、上位入賞を果たした。何度も好成績を収めるうちに日本へ留学しないかと勧誘された。大学三大駅伝常連の大学の先生を含め数名が、I氏の元を訪ねた。ケニアから数年前日本に留学した生徒が卒業するので、新たにI氏に来て欲しいとのことだった。別途、アメリカ留学の話も持ち上がっていたが、熱心な日本からのオファーを選択した。

・高校および大学留学中

I氏は大学の附属高校で1年間、「日本の文化とか勉強」をしたと言う。また、「誰もいなくて、コミュニケーションが一番大変だった」と振り返る。一方、この1年間は大学生とともに駅伝の練習を行っていたと話す。そして翌年大学に入学した。

大学生活は駅伝中心だった。「その頃は遊びに行ったり、携帯とかなかったですし。だか

ら一本道しかなかった。厳しかった」と、練習に集中することが出来たと語る。この結果、正月に開催された大学駅伝でエースとして大学二連覇に貢献した。

ただ、学年が進むにつれ就職について考えた。「第一希望は、いい結果出していい会社に入る。卒業したらいい実業団に入りたい」と、思っていた。

・就職のきっかけ

I氏は、「やり方が分からなかった」と話す。そのため、「どこの会社に行ったらいいか」と大学の先生達に積極的に相談した。先生達も親身になって就職先を探してくれた。

・就職（競技継続）

九州の実業団で活躍していた矢先、わずか数年で廃部になった。そこで、次は関東の実業団で競技を継続した。大学からのライバルとともに、海外でのレースも頻繁にこなした。

輝かしい成績を残す一方で、「走るのずっとするわけではないから。引退したら何をすればよいか」と、引退後のことも頭にちらついていた。日本に来て陸上をメインにした生活を送ってきたため、陸上の指導者になりたかった。所属していた実業団でも将来のことについて頻繁に相談を持ちかけた。競技生活は楽しかった反面、周囲に理解して貰えず辛いことも多かった。

・競技引退後

母国であるケニアに帰るつもりはなかった。「高校、大学、実業団と日本で長くやっていたのでお友達が多い。環境も慣れて来た。嫁さんと子供も日本にいますし」と日本に残る選択をした。

関東にあった大学（現在は閉校）の駅伝部コーチ就任の要請が、I氏に掛かった。そこは部員数も少なく、I氏も指導者としては初めてであり試行錯誤だった。しかし、努力が実り、

大学三大駅伝予選会にチームを導いた。

現在も首都圏の有名私立大学で駅伝部監督を務める。チームを一から築き上げる必要があったが、前の大学での指導経験が活かしている。また、部長や競技実績のあるコーチにも恵まれて環境が良いと話す。現在の大学では、年々チームの結果が上向いていることに手応えを感じる。今度はI氏が、部長やコーチとともにケニアに赴き留学生を探している。留学させるにあたり、長期的な目線で選手を見続けることが大事と言う。さらに、勉強熱心であることも必要と話す。

私生活でも、現役時代切磋琢磨したライバルとの交流は欠かさない。そして、送り出してくれた母国の家族へも様々な形で日本から援助し恩返しをする。

・日本で生活する上で必要な要素

「チームメイトと一緒に交流する」と、仲間とのコミュニケーションが必要と話す。そして、日本語の習得が出来なければコミュニケーションが出来ないと語る。更に、マナーを守ることの必要性を強調した。

また、「厳しいことがあっても。我慢して一生懸命やる」と、成長するためには必要だと話す。

・今後について

I氏が指導する大学は、まもなく設立100周年になる。正月に開催される大学駅伝に、大学単独で出場する事を視野に入れて、「何とか出れないか」と考えている。また、2020年には東京オリンピックが開催される。「今の学生の誰か一人でもオリンピック出れたら」とも語る。そのためには、選手だけでなく指導者であるI氏も頑張らなければと話す。

また、「みんながサポートしてくれた。私も答えない」と、これまで支えてくれた人達に感謝している。